

三年ゼミ発表・事前資料

「アウトサイダー・アート」

3年生一同

グループA 駒口、林、山崎、畑尾

グループB 水野、武田、木村、吉越

1. 発表に際して

今回私達は「アウトサイダー・アート」について研究・発表します。

「アウトサイダー・アートとは何か？」という純粋な疑問から始まった今回の研究ですが、「アウトサイダー・アート」というかつて「アートの外側」に位置づけられていた芸術を研究し、理解を深めることによって、「アウトサイダー・アート」とは一体どのようなものなのか、アウトサイダーでない芸術、いわゆる「アート」との相違は何なのか、そして「アウトサイダー・アート」と「アート」の価値、本質とは何なのかについて考えていきたいと思えます。

プレレジュメでは先日テキストとしてお渡しした『アウトサイダー・アート』（服部正著、光文社新書）の要約を載せてあります。アウトサイダー・アートに対する理解を深めるものとして、そして議論を行うための基礎知識として、目を通しておいってください。

3年生一同

駒口、竹田、林、水野、山崎、畑尾、木村、吉越

2. テキスト『アウトサイダー・アート』要約

第1章 アウトサイダー・アートとは何か

【アウトサイダー・アートとは？】

- ・美術教育とは無縁の作者たちが作り出すもの
- ・アートの世界の枠組みを突き破ってしまうような、真の驚きを与えてくれる作品
- ・既成の枠組みをはみ出してしまう自由さ、奔放さを持つ作品

【l'art brut (アール・ブリュット)】

- ・フランスの芸術家であるジャン・デュビュッフェ (Jean Dubuffet、1901-1985) が考案した言葉。「生の芸術」「加工されていない芸術」の意。
- ・精神の障害のある人、幻視家などが制作した絵画や彫刻。
- ・「芸術的教養に毒されていない人々」が制作した作品。

※デュビュッフェが定義した「アール・ブリュット」の定義

背景	: 過去に芸術家としての訓練を受けていないこと。
創作動機	: 芸術家としての名声を得ることではなく、あくまでも自発的であること。 (他者への公開を目的としなければ、さらに望ましい)
創作手法	: 創作の過程で、過去や現在における芸術のモードに影響を受けていないこと。

第2章 ヨーロッパ前衛芸術家たちによる賞賛

【アウトサイダー・アートの価値】

→目利きによる権威付けが必要

※アウトサイダー・アートにとって最初の目利きは20世紀前半の前衛的な芸術家達だった。

①ドイツ表現主義の画家

- ・パウル・クレー (1879-1940) など
- ・子供や精神障害者の作品を知性に頼らない衝動的な芸術として評価した。

→ドイツ表現主義の画家たちにとっては、アウトサイドという存在のあり方や、理念が重要であった。

②シュルレアリスト

- ・アンドレ・ブルトン (1896-1966)、マックス・エルンスト (1891-1976) など

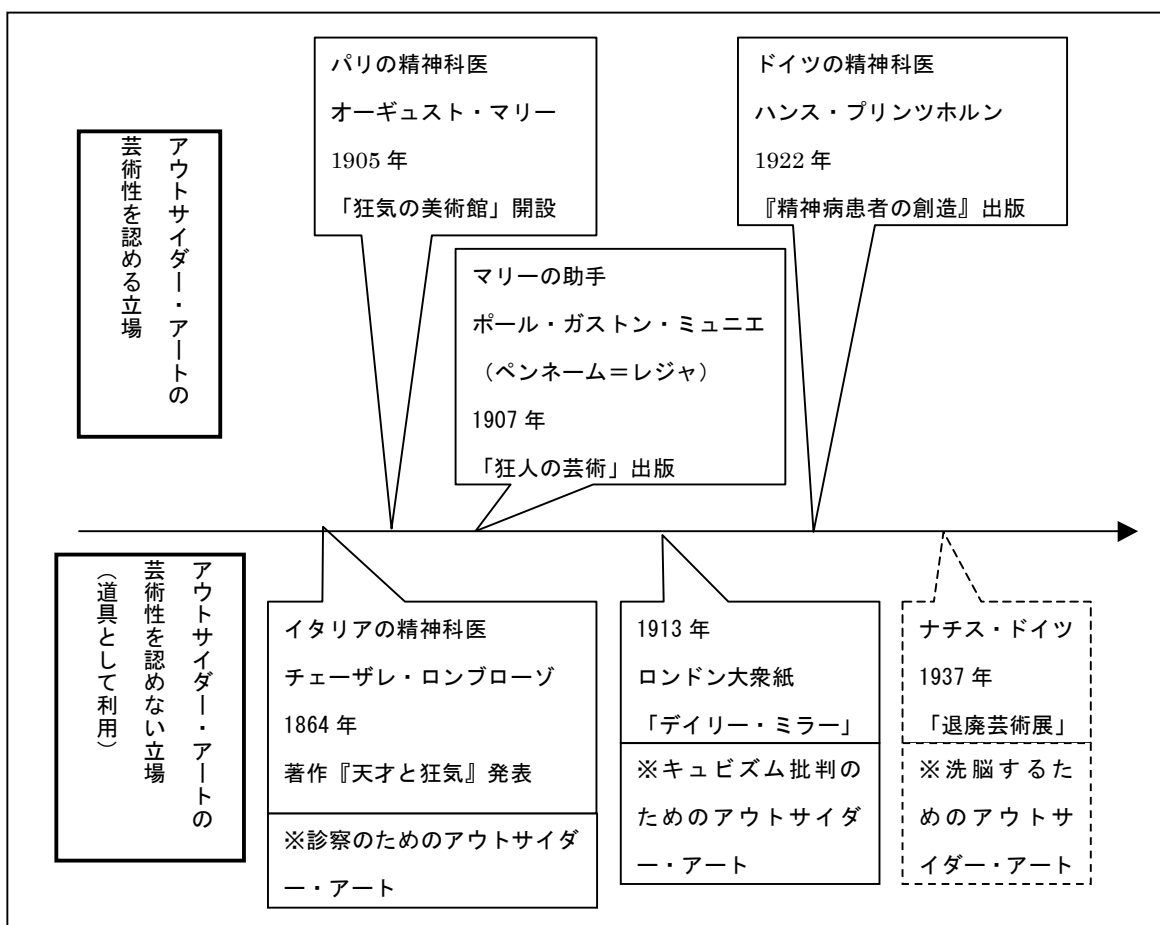
・合理性に新しい芸術の可能性を見出した。

→シュルレアリストたちはアウトサイダー・アートの芸術性を高く評価したが、それは自分たちの作品を認めてもらうための手段にしかすぎなかった。

③ジャン・デュビュッフェ（1901-1985）

・ヨーロッパの伝統的な芸術や文化を強烈に批判し、生の芸術を賞賛した。

第3章 アウトサイダー・アートの発見



第4章 日本のアウトサイダー・アート

【式場隆三郎（1898-1965/精神科医、文筆家）】

- ・精神病理学の立場からゴッホを研究
- ・東京深川にある奇妙な家屋、二笑亭を研究

ex) 洗い場の無い風呂、手の届かない帽子掛け、など

『二笑亭綺譚』(1937) 本編とは別に、精神障害者や知的障害者の作品図版が掲載。
日本で出版された最も早いアウトサイダー・アートの単行本

- ・ 山下清 (1922-71/福祉施設八幡学園で生活) のプロモーション
- 医師という使命感から、障害者の「教育」という方向へ
- 戦後の日本におけるアウトサイダー・アートは、「教育」という重い十字架を背負う。

第5章 未知の領域

アウトサイダー・アートに対するヨーロッパと日本の相違

<ヨーロッパ>	<日本>
<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医が一時的な資料の提供、自分が所属する病院で作られられる作品をもとに著述や展示を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医が一時的な資料の提供、自分が所属する病院で作られられる作品をもとに著述や展示を行う。
<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「前衛アーティスト」たちがアートの領域へとつなげる。 	<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に社会に訴えるアーティストはほとんど存在しなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・シュルレアリスムへ（無意識・非現実） 	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトサイダーから目をそらす。
<p>※ブルトン、エルンストなどによるアウトサイダー・アートの芸術性の評価、賞賛</p>	<p>※精神科医であり芸術愛好家でもあった式場隆三郎がアウトサイダー・アートを取り上げる。→しかしそれは医師として、教育者として社会福祉向上を目指す。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・<u>教育を受けていない「生の芸術」を強調</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>美術がもつ教育的立場を強調</u>
<p style="text-align: center;">⇔</p> <p>=芸術的教養に毒されていない、自由な創造に価値をおく。</p>	<p style="text-align: center;">⇔</p> <p>=癒しや教育による技量の発展に価値をおく。</p>

第6章 描かずにはいられないから描くー5つの展示室からー

1. アラベスクの物語

※アラベスク＝幾何学的な文様や植物文様による壁の装飾。

【装飾的に画面を埋め尽くすという衝動とそれに拮抗する具象的なモチーフや物語性】

→アウトサイダー・アートの中にも装飾的な文様で画面を埋め尽くすような絵を書く人が多い。

ヘンリー・ダーガー(1882-1965)

→『非現実の王国にて』15000ページにも及ぶ物語絵巻

ロール・ピジョン(1882-1965)

→夫との別居をきっかけに繊細で緻密な絵を描く。

寺下春枝(1928-)

→宗教家。人智を超えた力により作品を制作

坂上チユキ(????-)

→解離性同一障害

2. 光の呪縛を逃れて一目の見えないアーティスト

エミール・ラティエ(1894-1984)

→様々な素材を用いてオブジェを作成。 「塔」「曲馬師」

光島貴之(1954-)

→色つきのテープやシートを用いて絵を描く。 「缶コーヒーを飲む」

3. 歩く人、拾い続ける人ーゴミとアートー

矢島孝一(1963-)

→道で拾ったゴミを集めてオブジェを作成。 「かまきり」「かえる」

フェルディナン・シュヴァル(1836-1924)

→1人で拾い集めた石とセメントで33年かけて建築

4. 大いなる叙情伝

小幡正雄(1943-)

→架空の自叙伝を創作 「結婚式」

アドルフ・ヴェルフリ(1864-1930)

→25000ページの壮大な叙事詩 「ゆりかごから墓場まで」

5. 繰り返せばアートになる

ガストン・ジェフ(1920-)

→サイを繰り返し描く

喜捨場盛也(19??-)

→漢字を偏愛し、紙に小さな文字をぎっしり埋め尽くしていく